

安全でおいしい農産物を地元消費者に
地産地消で夢のある楽しい農業を

鳥取県西伯郡伯耆町

伯耆町認定農業者 福富大輔

はじめに

営業マン時代に、日本全国で様々な優良農家と接し、様々な栽培技術を見てきたものをどうしても実践してみたくなり、会社を退職し実家の農業を手伝うようになって十数年。本格的に担い手になって約 10 年。

年々少しずつ経営面積を拡張し、請負作業も増え、中古機械を揃えるところからはじめた稲作も、現在は新しい機械を更新しながら一定の規模まで賄えるようになって来た。

米の販売単価の下落分も独自の販路確保と総収穫量の増加でなんとか対応してきた。

ここにきて両親も 70 代になり、あらためて労働環境を見つめなおしてみると、種蒔き、育苗、田植、収穫、出荷作業など、どれをとってもまだまだ根本的に改善しなければならない作業内容が多いことに気がついた。機械や設備の能力不足も規模拡大の足かせとなっている。労働力の確保も考えていかなければならなくなってきた。

私の住む伯耆町坂長地内でも高齢化と担い手不足により、若い労働力が不足する農家が増加傾向にある。そういった近隣農家からの作業委託の話も年々増加傾向にあるが、機械・設備の処理能力に限界もあり、現状では要望に応え切れていない。

目指すところは、顧客に満足してもらえ、おいしくて安い安全な農産物を生産することで地産地消に貢献し、地元の消費者に喜んでいただくことと、従来どおりの手をかけた有機物を積極使用する栽培方法で、圃場をいためず景観を損なわず、地力を維持するとともに、省力化と設備増強によって無理なく規模を拡大できる体制にすることで、地域の農業を守ることである。農地中間管理事業にも地域の農地の受け手として手を挙げており、高齢化などにより経営転換や農業をリタイアされる方々の農地を積極的に受けて、荒廃地の発生を防ぐことで農地を守っていきたくと考えている。

また、近隣の若手担い手の育成や手助けとなり、共に地域農業を盛り上げる仲間を広げることで、地域に貢献したいと願うようになったため、このプランを考えるきっかけになった。実際に、現在も人数は少ないが互いに協力し合える体制を築いており、指導・サポート体制を確立させ、就農・独立自営を促進し、伯耆町の地域農業を守っていく農業者を増やしていきたい。

1. 経営の現状

現在、父母と3人で稲作専業で約9ha弱の経営をしている。

自作地は50a、残り8.5ヘクタールはすべて小作地となっている。

苗作りから田植え、収穫、乾燥、もみすり、精米、袋詰め、販売までを一貫して自家でおこなっている。

作業受託等については、水稻苗の育苗と供給を近隣農家と栽培グループ分合計で約40軒分、約3,000枚を受け持っている。

そのほか耕起1ヘクタール、代掻き3ヘクタール、田植3ヘクタール、あぜ塗り10ヘクタールなどの受託も受けている。

収穫期は、地域のミニライスセンターの役割を担っており、近隣農家の刈取10ヘクタール、近隣農家および栽培グループ分の乾燥調整・籾摺り7ヘクタール分（およそ40件）を受託している。

小作契約、作業受託とも年々増加傾向にあり、小作の依頼は毎年1ヘクタール以上あるが、対応しきれっていないのが現状である。

表1 経営の現状（平成26年度実績）

品目		面積・数量	収量 (kg)
水 稲	コシヒカリ	220a	9,900
	ヒカリ新世紀	40a	1,440
	ミルクークイーン	75a	3,375
	きぬむすめ	250a	15,000
	ハクトモチ	40a	2,040
	日本晴（飼料米）	230a	
	みつひかり（業者委託）	25a	
作 業 受 託	育苗	3,000枚	
	耕起	100a	
	代かき	300a	
	田植	300a	
	刈取	1,000a	
	乾燥調整	700a	

作付は食用米がメインとなっており、飼料米と一部食用米を農協に出荷する以外は、大半が県西部の顧客に向けた直接販売用である。

ほとんどは独自に開拓した青果市場の中卸業者とクチコミの顧客ばかりであるが、市場での評価は高い。

例年、5月初めには前年秋収穫分の在庫が完売しているため、5月以降は出荷先をかなり

絞ったうえ、農協から50袋程度調達して対応しているが、秋までの十分な在庫をまったく確保できていない。

販売については、大口取引については現在窓口となる業者・店舗が1社と3店舗ほどあり、都度注文に応じて自家で精米、印刷したポリ袋に袋詰めし、出荷をしている。出荷形態は10kgおよび5kgが最も多い。

販売先で最もシェアを有するのはA総合食品卸業者で、青果市場内店舗と本社事務所に5kgポリ袋の形態で納入している。年間販売数量は約10トンある。

販売先3店舗については、いわゆる家族経営の八百屋形態ではあるものの、各店舗ともに年間販売予想数量は3トンを超えるため、大変重要な得意先となっている。

表2 食用米の販売実績（平成25年度）

販売先	販売量 (Kg)	販売金額 (千円)
系統販売	6,000	
直接販売	24,000	

表3 直接販売量の推移（過去実績）

年度	H22	H23	H24	H25
販売量 (kg)	12,800	16,500	22,000	24,000

表4 平成25年産米 直接販売量の内訳（平成25年9月～平成26年5月）

販売先	販売開始時期	販売終了時期	販売量 (kg)
A総合食品卸業者	平成25年9月	平成26年5月	10,500
B青果店	平成25年12月	平成26年5月	1,800
C商店	平成25年9月	平成26年5月	2,500
D商店	平成25年9月	平成26年5月	2,250
その他諸口	平成25年9月	平成26年5月	6,950

栽培については、発酵鶏糞と米ぬかで土作りをし、有機含量の特に多い有機化成肥料のみを元肥と追肥に使用している。

栽培技術も一般的な植付間隔（株間20cmから22cm）よりも植え付け間隔を広く取って（株間30cm）風通しを良くし、光がよく当たるように気を配り、稲本来の持つ力強さを引き出すような栽培を実践している。またこれによって種もみ購入代金や育苗コストの削減、田植え苗の使用枚数の半減などによるコスト削減にも役立っている。

毎日口にするものなので、食の安全に気を配って減農薬にも取り組んでおり、慣行栽培の半分以下の低農薬栽培をおこなっているが、収穫量は慣行栽培の1.1～1.2倍となってお

り、品質についても高品質を維持し続けている。

新品種の選定と導入試験も毎年実施しており、奨励品種になる数年前から栽培している品種も少なくない。ヒカリ新世紀は鳥取県西部でもっとも導入が早く、昨年度から鳥取県で奨励品種になっているきぬむすめも5年前から導入して栽培しており、昨年度からはミルキークイーンの栽培を始めた。

疎植栽培と有機主体の肥培管理法は現在、他2名とともに取り組んでおり、販売先も一部共有する関係にある。

また、疎植栽培については苗を供給している近隣農家にも情報を提供している。供給先のトータル使用苗数が年々減少してきており、少しずつ普及しかけているように感じている。これによって、余剰苗を規模拡大した圃場に使用できるようになり、育苗管理も現状維持のままで推移している。

表5 栽培方法によるコストダウンの取り組み

項目	慣行栽培	我が家の取り組み	効果
種もみの播種量	苗箱あたり 160~200 g	苗箱あたり 128 g	4,000 枚で 128kg ~ 288kg の削減
植え幅 (株間) ※1	20~22cm で 10a あたり 16~20 枚の苗が必要	30cm で 10a あたり 10 枚の苗が必要	10a あたり 6~10 枚の 削減
肥料	化学肥料主体	有機肥料と有機物	高品質で食味良好 高値で取引ができる

※1 株間 30cm 疎植栽培のメリット

- ・ 苗箱数が慣行栽培の約半数になるので、育苗コストの半減、田植え作業時の苗補給回数
の半減など、作業負担の軽減につながる。
- ・ 慣行栽培と比べ、同等かそれ以上の収量が期待できる。
- ・ 圃場の中心部まで株の張り方が大きく、一本一本が太いので風雨に強く倒伏しにくい。
- ・ 倒伏しにくいので、収穫作業がスムーズに進み、よく乾燥しているので品質も安定する。
- ・ コンバインに詰まらないので、機械が傷まない。メンテナンスも楽になる。

表 7 農業機械施設の整備状況（平成 27 年 1 月現在）

区 分	台数	能 力	年間稼働時間	導入年度	備考
作業場	1	120 m ²	—	—	H26 増築
田植機	1	5 条・側条施肥機付き	10 h	H16	
	1	5 条・側条施肥機付き	85 h	H26	
コンバイン	1	43ps・4 条	120 h	H19	
乾燥機（注）	2	20 石	約 220 日	H10	
		20 石	約 220 日	H15	
トラクター	2	37ps	80 h	S62	償却済
		34ps	250 h	H23	
籾摺り機	1	5 インチロール式	70 h	H19	
籾播種機	1	全自動 100 枚/h	45 h	H10	
あぜ塗り機	1	リバース式	40 h	H25	
代かきハロー	1	3.2m 両開き式	60 h	H23	
軽トラック	1		年間 15,000km 走行	H14	償却済
フォークリフト	1	1.5 t ガソリン	70 h	H27	リース
精米機	1	業務用 300kg/時間	120 h	H15	
ビニールハウス	3	360 m ² ×3	約 60 日	—	

注：乾燥機は、収穫作業が終わってからも籾貯蔵設備として年間を通して使用するため、この日数とした。

2. 経営理念とプランの目標

I 経営理念

① 「品質は営業力」

減農薬と有機物を積極使用する栽培法と作物本来の力を生かす栽培技術によって高品質を維持し、安全でおいしい農産物を消費者に安定提供することで信頼を確実なものとし、それによって販売数量を伸ばし、農業所得の向上を目指す。

② 「信頼できる仲間とともに」

やる気のある若手担い手に技術の提供や作業機械の貸し出し、農産物の販売ルートの情報提供などをおこない、労力を補完しあい、それぞれの収入を向上させ、同じ志を持つ仲間とともに将来に希望を持てる農業を目指す。

③ 「地域社会に貢献できる農業」

近隣の担い手と協力することで作業受託面積を拡大し、地域の農地を保全するとともに、地域への貢献をしながら存在価値のある農業経営を目指す。

II プランの目標

- ① 作付面積、作業受託面積の拡大と生産グループの拡大により、米の収穫量を増やし、年間を通して安定供給できる体制を構築する。
- ② 近隣担い手との連携により、農機具や作業機械・車両を貸借しあうことによって、お互いの生産性の向上に役立て、収入の増加と経営の安定を目指す。また、やる気のある若手を育成し、理念を共有できる仲間を増やし、地域農業を活性化する。
- ③ 作業環境の改善と設備の強化により生産体制を整え、経営規模の拡大と作業の効率化を目指す。同時に、今以上に作業受託できる環境を整え、周辺農地の保全と有効活用に寄与する。

表 8 現状と年次目標

		現 状 H26	目 標			
			H27 見込	H28 見込	H29 見込	H30 見込
水 稻		8.8ha	9.8ha	11.2ha	12.1ha	13.5ha
作 業 受 託	田植え	3.0ha	3.5ha	4.0ha	5.0ha	5.0ha
	稲刈り	10.0ha	10.0ha	12.0ha	12.0ha	12.0ha
	乾燥調整	5.0ha	6.0ha	6.5ha	7.0ha	7.0ha
	耕起	1.0ha	1.0ha	1.0ha	1.5ha	2.0ha
	代かき	3.0ha	3.0ha	3.0ha	4.0ha	5.0ha
	水稻育苗	3,000 枚				
労働従事日数 <small>注1</small>		240 日	245 日	252 日	255 日	260 日
延べ雇用人数 <small>注2</small>		8h×12人	8h×18人	8h×24人	8h×30人	8h×30人

注 1：実労働には事務作業、出荷のための精米・袋詰め作業を含む。

注 2：実際には数量払いだが、同金額を時給に換算して人数割りとして表示。

表 9 品種別水稻生産面積内訳

品 種	現 状 H26	目 標			
		H27 見込	H28 見込	H29 見込	H30 見込
コシヒカリ	220a	200a	200a	180a	180a
ヒカリ新世紀	30a	-	-	-	-
ミルキークイーン	75a	105a	130a	150a	180a
きぬむすめ	250a	335a	360a	390a	400a
ハクトモチ	40a	60a	60a	60a	60a
日本晴（飼料米）	230a	300a	400a	450a	550a
みつひかり（業者委託）	25a	-	-	-	-
合 計	880a	1,000a	1,140a	1,230a	1,370a

表 10 食用米品種別生産量 (玄米)

単位 : Kg

品 種	現 状 H26	目 標			
		H27 見込	H28 見込	H29 見込	H30 見込
コシヒカリ	9,900	9,600	9,600	8,640	8,640
ヒカリ新世紀	1,440	-	-	-	-
ミルキークイーン	3,375	5,040	6,240	7,200	8,640
きぬむすめ	15,000	20,100	21,600	23,400	24,000
ハクトモチ	2,040	3,060	3,060	3,060	3,060
合 計	31,755	37,800	40,500	42,300	44,340

※ 各品種とも、我家の過去の実績から照らし合わせて平均的な数量を算出。

コシヒカリ、ミルキークイーンは 10a 当 480kg で計算。

きぬむすめは 10a 当 600kg で計算。

ハクトモチは 10a 当 510kg で計算。

表 11 食用米の販売目標 (玄米)

単位 : Kg

販売先	現 状 H25 実績	目 標				
		H26 見込	H27 見込	H28 見込	H29 見込	H30 見込
系統販売	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000
直接販売	24,000	24,500	30,000	33,500	35,200	37,300
合 計	30,000	30,500	36,000	39,500	41,200	43,300

(注) 各年度とも、およそ 1,000kg は保有米として処理。

3. 課題と改善内容

- ・現状では米の個人向け販売価格を上げることが難しいため、所得向上のためには販売方法や販売量、付加価値の活用を見直す必要がある。
- ・生産規模拡大と作業受託面積拡大のためには全体的に機械・設備の処理能力が不足しており、強化が必要となっている。
- ・生産規模拡大に伴い、維持管理や作業効率の問題を解決する必要がある。また労働力をどのように確保するかも課題となっている。

(1) 米の販売について

現状

食味の追求と安全性にこだわり、減農薬と有機物を積極使用する方法で栽培しているが、収量も品質も安定しており、前述の通り安定して個人の顧客との取引が出来ている。

しかし現状で需要に十分応え切れるだけの在庫が確保できていないため、顧客には毎年迷惑をかけている状態である。

改善内容

① 販売方法の見直しと新規顧客の開拓

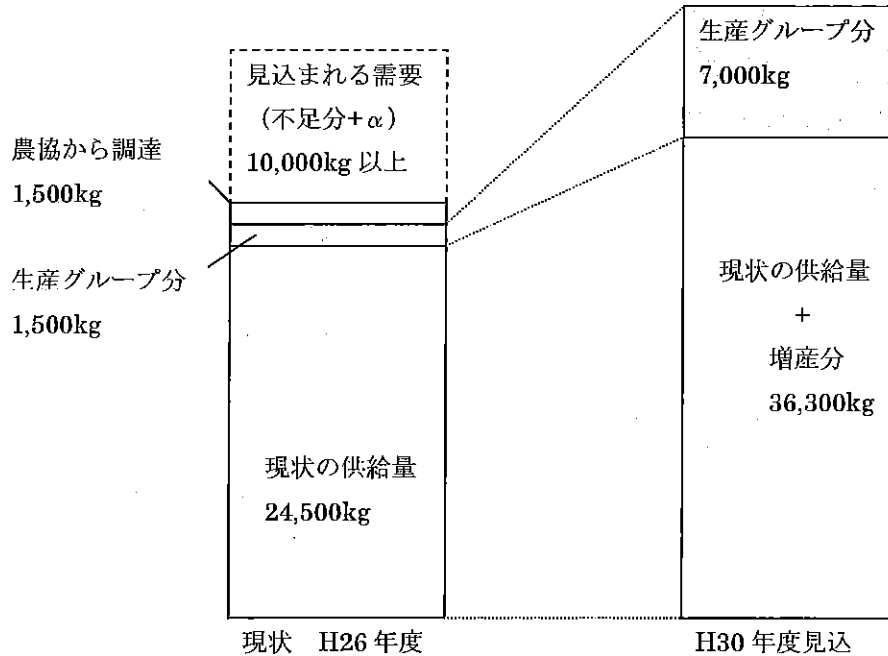
現在、ポリ袋（10kg と 5kg）での店頭販売を主にしており、販売については各店舗まかせになっているが、年末のお歳暮向けの贈答パッケージの紹介や、店頭向けの新米入荷のぼり、ポップ等の広報宣伝資材の配布などの販促活動、各店舗との情報交換といった営業活動によって、販売店ごとに、客層や嗜好によるニーズを見極め、さらなるブランド浸透を図るとともに、きめ細かな品揃えに対応していく。（表 12）

また、近年もち米の需要が増加傾向にあるため、増産も視野に入れており、今年度から 20a の増産を計画している。

表 12 主要三品種の品質特性と需要の動向

品種名	食感	食味	需要の動向
コシヒカリ	ふんわり	あっさり	お年寄、歯の悪い人、離乳食用など。 軟らかいご飯を好む人向け
きぬむすめ	しっかり	やや濃厚	若者向けや、すし用の米など。 硬めのご飯を好む人向け
ミルクークイーン	もちもち	濃厚	冷めても食味が良いので弁当用など。 もちもちしたご飯を好む人向け

図2 食用米増産と生産グループ形成による供給量の確保



(2) 労働力の確保

現状

父母が高齢化し、荷役作業などの重労働が負担になりつつあり、この先家族のみでの経営も厳しくなっていくことが予想される。

また、個人向け出荷が年々増加し続けているため、出荷作業などでの労働力をどう確保するかが問題となってくると思われる。

ただ、繁忙期は4月～6月の播種から田植までの時期と、9月～10月の収穫期と限定的であるため、季節労働というかたちでしか雇用確保は難しいと思われる。

改善内容

① 栽培グループ、近隣若手農家との連携

近隣にも少数ながらやる気のある若手担い手がいる。

やる気はあるものの、兼業であったり、小規模であったりするために機械や設備を揃えることが難しく、認定農業者になることも厳しい若手というのも少なからずいる。

そういった担い手と協力することで、お互いの経営にプラスとなるような連携を模索しているところである。

今後、規模拡大するためにも労働力の確保はたいへん大きな問題となってくると思われる。

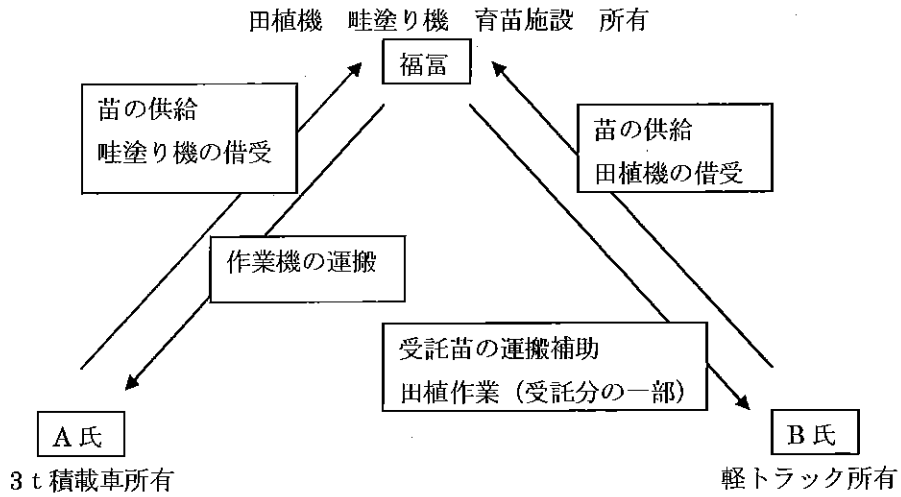
これを解決する手段としても近隣担い手との連携は重要であると考えている。現在、2名と協力関係にあるが、将来的には5~6名まで仲間を増やし、播種や苗の運搬、耕起や代かき、田植えなどの作業時に協力してもらったり、みんなで地域の作業を請負ったり、生産グループとして販売ルートを拡大するなど、お互いに様々な分野でプラスになるような団体になるようにしたいと考えている。

その際は自分がサポート役として、技術や情報などの提供、肥料など生産資材の取りまとめ、農機具の貸し出し、作業の割り振りなどを引き受けることを考えている。

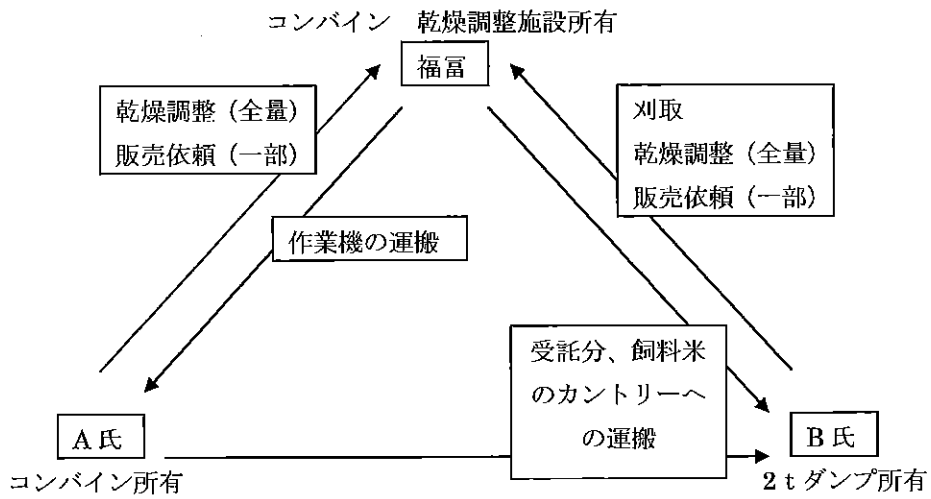
具体的には、水稻の比率が比較的少ない農家、栽培面積が少ない農家など、繁忙期でも比較的時間に余裕のある農家に協力してもらい、作業を手伝ってもらおう。

図3 グループの相互関係

春作業（田植まで）

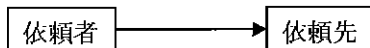


収穫期



玄米の取り扱いについては30kg 円で買取

注：矢印は依頼先に向いている

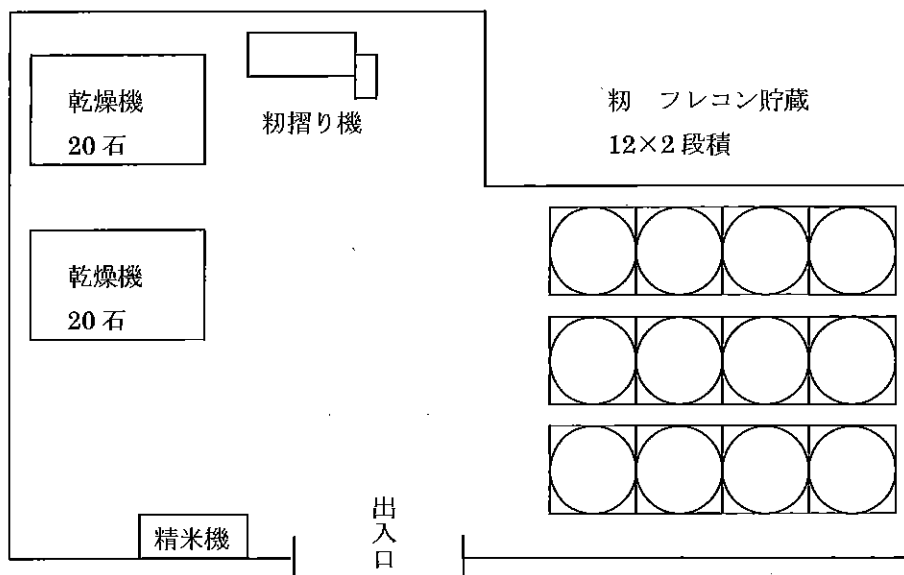


② 貯蔵施設など、作業環境の改善

本年度春に施工した建屋の規模拡大に伴って、以前より余裕のある空間が出来あがった。これを機に機械設備の配置などを見直し、十分な作業スペースを確保するとともに、フォークリフト、パレット回転台等の荷役・運搬機器が効率よく利用できるようにする。

また、貯蔵タンクや計量器、搬送装置を導入することが可能となったため、もみすりや袋詰め作業の流れを改善し、1名でも作業できる環境を整え、作業者の負担を軽減する。

図4 乾燥貯蔵施設の現状の配置図



③ 新規需要米（飼料米）の作付け増加による労力の削減と経営の安定化

飼料米は乾燥調整の必要がなく、刈取後はカントリーへの搬入で作業が終わる。また、普通に管理さえ出来れば収量も安定するので作業計画が立てやすい。

さらに経営に飼料米を導入することで、天候不順や食用米の価格下落等による収益リスクの分散と、一括での収入が見込めるため、年度末の資材等の一括支払いにも対応できる。

飼料米の作付けを増やし経営に取り入れることで、労力の削減と収入の安定を図る。

(3) 機械設備

現状

農業機械を含め、現在の設備全体の能力は経営規模 4～6ha を目指して拡充してきたものであるため、9ha まで規模拡大した今では能力的に限界になっている。

また、受託面積も増加傾向にあり、これから栽培グループの面積も増加していくため、収穫期のミニライスセンターとしての役割もほぼ限界になっている。

これ以上の経営規模の拡大、作業受託拡大に対応するためには、設備の増強が必要不可欠となっている。

① 乾燥機の増設と増強（平成 27 年度増設、平成 28 年度 2 台導入）※支援事業

現状の 20 石 2 台では一日の処理能力が 50a ほどしかないため、状況によっては午後 2 時頃には刈取を終了しなければならないので、時間が無駄になってしまう。作業受託の日程も現在ではかなり詰まっており、日程の調整が非常に難しくなっている。また、一日あたりの受託分受け入れ量も一台あたり 25a までに制限しなければ処理できないため、増加する受託に対応できなくなっている。

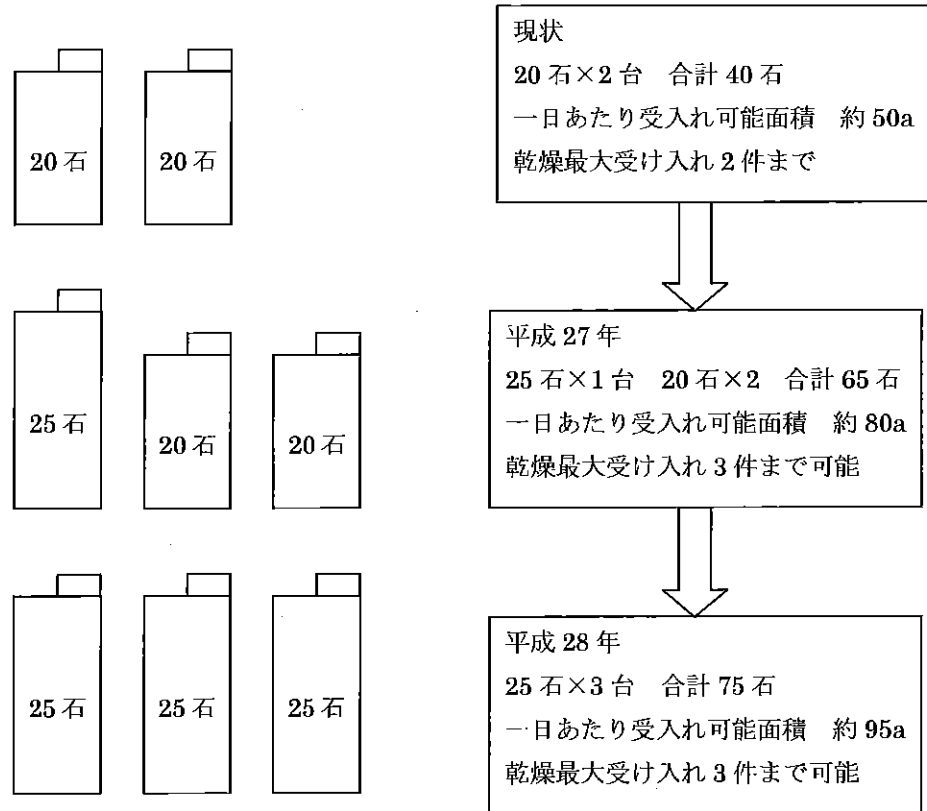
27年度に 25 石の遠赤外線乾燥機を 1 台増台して 3 台合計で 65 石の処理能力とし、一回の乾燥能力を強化することで、収穫作業と乾燥調整作業の効率を上げ、近隣農家からの受け入れ量増加もあわせて図る。

また、現状 2 基のメーカーサポートが 27 年度 3 月で終了し、消耗品および制御基盤などの核心部品の供給が停止するため修理が不可能となってしまった。故障した際はミニライスセンターとしての機能が完全に停止し、まったく受け入れが出来なくなってしまうので、現在受け入れている 30 戸あまりの近隣農家にも多大な迷惑をかけてしまうことになる。

施設が止まってしまうと、消費者の新米を望む声にも対応が出来なくなる恐れがあるため、対策が不可避となっている。

28 年度に、現状機 20 石 2 台に、規模拡大に合わせ必要な乾燥機を 25 石 1 台増強し 3 台体制とし、最終的には、29 年度には 25 石 3 台の 75 石体制を目指す。これによって、一日約 95a の収穫作業が可能となり、作業量を現状より倍増できる。また、受託分の反別受け入れ量も一台あたり 25a から 30a に増えるため、ミニライスセンターとしての機能も十分に発揮できるようになると考えている。

図5 乾燥機的能力増強による作業量の増加



② 玄米貯蔵タンクの導入（平成 27 年度予定）※支援事業

現状では、籾摺り機から直接選別・袋詰めと続くため、籾摺り機の処理能力を 7 割程度に落として作業しなければ作業者の負担が大きくなってしまふ。

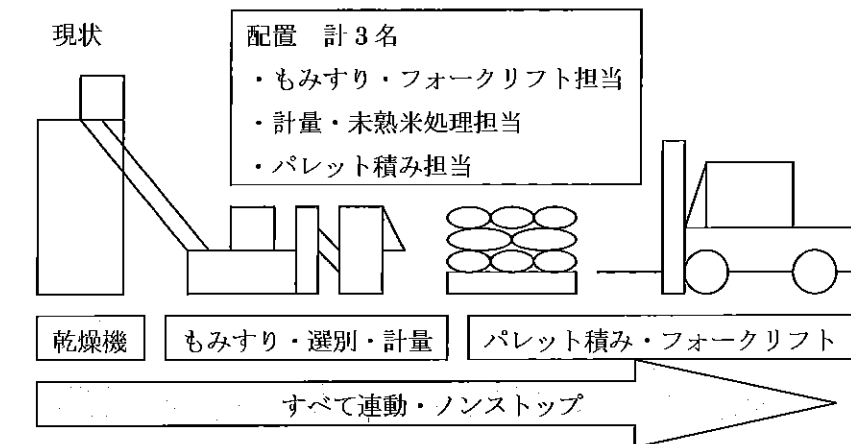
実際には、最大で毎時 66 袋処理できる籾摺り機を、毎時 46 袋程度に能力を落として稼働している。

このため、現状では受託分の処理も一日 2 件で午前中いっぱいしかかかってしまっている。

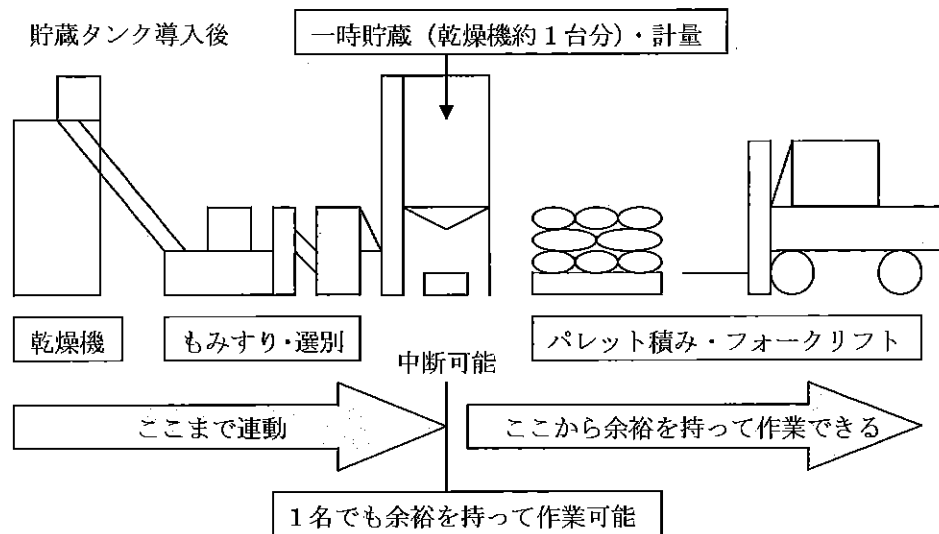
また、フォークリフトの使用もあるため、現状では常時 3 名いなければ作業ができない。

籾摺り機と計量器の間に 1,200kg の玄米一時貯蔵タンクを導入することで、1 名でも作業可能な環境構築と籾摺り機的能力を最大限活かせるように改善し、積み上げ作業時の労働負担軽減と乾燥機の稼働率もあわせて改善する。(図 5)

図6 玄米貯蔵タンク導入による作業負担の軽減

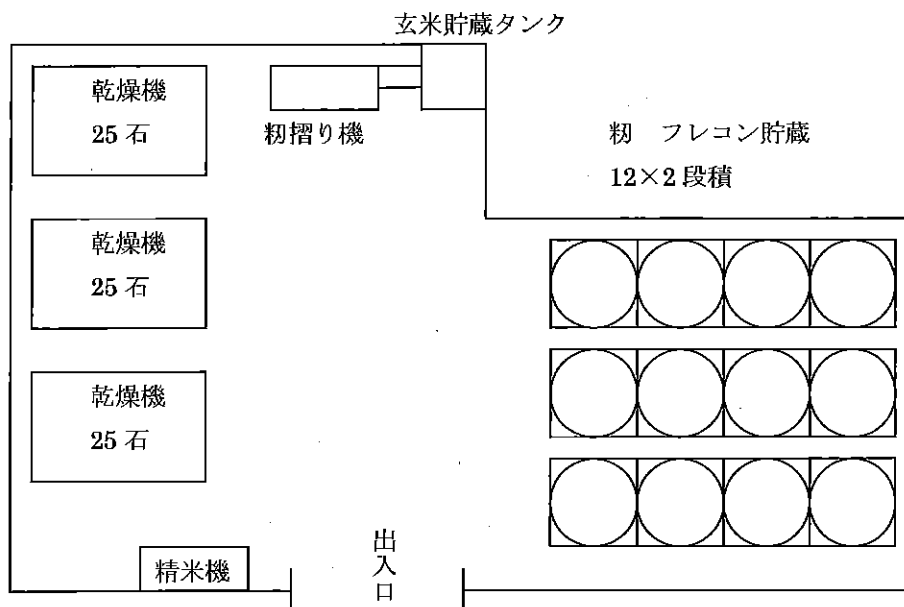


問題点：作業の中断は不可能。能力を上げると連続作業が厳しくなる。
処理時間の関係上、受け入れ制限をかけなければいけない。



玄米貯蔵タンクを導入することで籾摺り機的能力を最大限生かすことができる。
このため、一件あたりの処理時間の短縮が可能となり、受け入れ可能件数も1.5倍に増える。

図7 改善後の配置図 (H28年)



③ コンバインの導入 (平成 29 年度 8 月予定) ※支援事業

現状の 4 条刈り 43ps は、総作業時間が 800 時間に迫る状態になっており、故障や破損が年々ひどくなっている。

処理能力もエンジン馬力も新品当時と比べてかなり低下している。

本年度は約 130 万円かけてオーバーホールしたが、手の加えられない消耗部分はそのままで稼働している。

現在、西部地区でも品種の切り替えが進んでおり、「コシヒカリ」よりも太く硬い多収品種「きぬむすめ」を栽培する農家が増えている。

受託面積に対しての品種内訳もそちらにシフトしつつあり、機械にかかる負荷がさらに大きくなっているため、馬力不足を補うために速度を落として作業しなければ故障につながりかねない状況になっている。

現状機よりも能力の高い機種 (4 条・50ps クラス) を導入し、作業効率と処理能力を上げるとともに、受託作業を余裕を持ってこなせる態勢にする。

表 14 新規導入後の機械設備利用計画

	平成 27 年	平成 28 年	平成 29 年
乾燥機 20 石	→		
乾燥機 20 石	→		
(新) 乾燥機 25 石		→	→
(新) 乾燥機 25 石		→	→
(新) 乾燥機 25 石		→	→
(新) 玄米貯蔵タンク		→	→
コンバイン 43ps	→	→	
(新) コンバイン 50ps クラス			→

表 15 農業機械施設の整備予定 (平成 29 年度予定)

区 分	現状 (平成 26 年)		予定 (平成 29 年)	
	性 能	台 数	性 能	台 数
コンバイン	4 条 43ps	1	(新規) 4 条 50ps クラス	1
乾燥機	20 石	2	(新規) 25 石	3
玄米貯蔵タンク		0	(新規) 1,200Kg 貯蔵	1

表 16 今後の取組と役割分担

項 目	平成 27 年	平成 28 年	平成 29 年	実 施 主 体
乾燥機の増設と増強	◎	◎		県、町、本人
玄米貯蔵タンクの導入	◎			県、町、本人
コンバインの導入			◎	県、町、本人
籾摺り機の導入			○	本人
営業活動と新規顧客の開拓	○	○	○	本人

注：◎は、県、町の支援が必要なもの（頑張る農家プラン支援事業）

表 17 支援事業の内容

(単位：千円)

項 目	平成 27 年	平成 28 年	平成 29 年	負 担 区 分
乾燥機の導入	1,850	3,700		鳥取県 1/3
玄米貯蔵タンクの導入	605			伯耆町 1/6
コンバインの導入			8,000	本人 1/2
計	2,455	3,700	8,000	

※平成 27 年補助残は自己資金で対応、平成 28、29 年補助残については農業経営基盤強化資金（スーパー L）を活用予定。